連載

サンダル履き気ままの旅 9

◇時代劇の雰囲気あふれる大理と麗江（中国雲南省）◇

寺井 融
Terai Toru

昆明は〝常春の地〟大理へは夜行列車で

中国雲南省の省都・昆明に飛んだ。一年を通して、厳寒とか酷暑のときもなく、花が咲き乱れる〝常春の地〟である一九九九年には「花博」（世界園芸博覧会）も開かれた。街を歩くと、よく手入れされた花壇も目につく。年中、東京の五月みたいな気候だと思ったらよい。シンガポールや台湾の金持ちたちが、市内の中心部に、別荘替わりのマンションを持っていたりする。

その昆明から、まず夜行列車に乗った。約三百五十キロ離れた大理に向かう。

約八時間で大理石の産地として有名な大理市に着いた。白（ペー）族自治州の州都である。かつて大里国として、五百年ほど栄えた歴史を持つ。大理古城（旧市街）のホテルに荷物を預けて、すぐ車を走らせた。

目指すは山あいの温泉である。二時間ほど走ると、洱源県となる。二十一箇所の源泉がある温泉郷。その一つ、九氣温泉は、地方の小さな町の中心部にあった。玉湖温泉路の源泉を、町の人がポリタンクを持って汲みにきている。そのかたわらでは、温泉を使って洗濯をする女たちや、牛の内蔵や頭をゴシゴシ洗っている男たちもいた。

「いやぁ、すごいなぁ、すごい」

同行の友人・K君が、盛んにカメラを向けていた。

九氣温泉の源泉

禁止のナマ豚肉食べる人 温泉の公衆浴場でひと風呂

町の真ん中には市場がある。近郊の村々から、民族衣装を着た人たちが、作った野菜や手芸を売りにきている。

一角に茶店があった。木のテーブルで、皿に盛られた、いっぱいの生の豚肉を食している男たちを見かけた。K君は早速、カメラを出した。写真に撮ろうとしたら、手を振って、きつくダメを出

髪を手入れするペー族の女性

された。肉の生食は、当局から禁止されているためらしい。目つきの悪い労働者風の男たちに睨まれると、びびってしまう。

茶を飲むのもそこそこに、場所を替えた。塀で囲まれた大きな民家風の建物が、公衆浴場であった。

「女性が多いですねぇ」

友は、嬉しそうである。

「でもね、少々お年を召しているよ」

黒を基調にした服に、赤青緑色のカラフルな飾りが入った、民族衣装をまとったペー族の女性たちが、お客さんである。子宝の湯だそうで、人気の温泉だとか。六畳ほどの個室が、独居坊のように連なっている。

コンクリートむき出しの部屋の中には、三畳ほどの埋め込み式湯船があった。源泉は七十六度。そう聞いていたけれど、湯は四十度ぐらいであった。ちょうどよい湯加減である。

九氣温泉のある町

「これで、混浴だったらなぁ」

K君は、そんな不謹慎なことをいう。でも、ここは混浴禁止である。たとえ夫婦であろうとも、同じ風呂に入ることはできないという。

ひとつ風呂を浴びて、途中で藍染めの工房に寄ってから、帰路についた。

CD盤もの大きさの月餅 雲南省は日本人のルーツ

大理には、崇徳寺三塔や洱海という湖、蒼山のロープウェイなど見所が多い。中でも大理古城は、時代劇にそのまま使えるレトロ感あふれた場所である。明代の初頭に作られたそうだ。南北の城門をまっすぐに結ぶ復興路を、ぶらり散歩するとよい。お土産屋や食堂も軒を並べている。歩いていると、物売りの声もかかってきた。

九月に訪れたので、本場の月餅を買った。CD盤ほどの大きさである。割って、二人で分けて食べた。一度に、食べ切れなかった。味は、日本で売られているより、少々甘い。

大理から、北に二百三十キロ内陸に進むと、納西（ナシ）族が多く住む麗江がある。中心には、三キロ平方メートルほどの麗江古城（旧市街）があるのだが、他の中国の都市のように城壁に囲まれていない。ちなみに、大理には立派な城壁があった。その昔、

このあたりを治めていた木氏が、「城壁で囲むと『困』という字となり、縁起が悪い」と嫌ったからだ、との説がある。

古城地区には、水路が縦横に張り巡らされていて、柳の並木もそこここにあって、どこか落ち着く。篭をかついだ農家の人にすれ違うと、「アッ」と声をあげたくなる。日本の田舎で出会った誰かさんと、そっくりなのである。日本人のルーツの一つが、雲南省だといわれる所以であろう。

「いやぁ、ミャンマーみたいですねぇ」

雲南省の田舎で布クツを買う筆者

K君の感想である。地続きのミャンマー・シャン州には、日本人とそっくりの人たちがたくさん見かける。納豆や野沢菜、冷奴も常食にしていて、驚いたものだ。

麗江は象形文字の古里 身体温まる名物・ヤギ鍋

麗湖の町の裏手にある獅子山に登ると、黒い甍が折り重ねるようにつづく。明清時代にタイムスリップしたように感じる。玉泉公園内には得月楼や五鳳楼があり、ここは京都か高山かの気分になった。

麗江はまた、東巴（トンバ）文字と呼ばれる、ナシ族特有の素朴な象形文字の古里でもある。日本の女の子の間でも、一時、似たような絵文字が流行ったこともある。お土産には、それらトンバ文字を記したハンカチなどもよいかもしれない。

お土産屋には、毛沢東と林彪が肩を並べている絵皿が売られてあった。文革初期のころのものかと、気持が高まる。「いや、昔のではなく、あらたに作ったものが多いのですよ」とは、ガイド氏の意見である。彼は、宗教的文化財がこわれていると、なんでも「四人組がこわしました」と説明する癖があり、いつも眉に唾をつけて聞いていたのだが、皿の話は妙に納得できた。

町の背後には、標高が約五千六百㍍の未踏峰・玉龍雪山がある。高山植物の宝庫であり、中腹の湿原地帯では、ナシ族やチベット族の女性が、観光客相手に踊りを披露してくれている。馬で林の中を駈け抜けたが、すこぶる爽快であった。

三千㍍を越える平坦部には、ゴルフ場も新設されている。プレー中、客に小型酸素ボンベを提供してくれるそうだ。富士山とほぼ同じ高地にあるのだから、ありがたいサービスかもしれない。

麗江名物は、ヤギ鍋である。食べた友の反応は、「塩味チャンコみたいですな。臭みがあまりなくていけるけど」というもの。当方は子供のころ、ヤギを飼っていた経験があるので、あまり食が進まなかったが、身体は確かにあたたまった。

《参考文献》
菊間潤吾監修『中国の真髄』新潮社
鎌澤久也著『雲南最深部への旅』㈱めこん
寺井融著『サンダル履き週末旅行』竹内書店新社
写真提供＝郡山貴三

■てらいとおる　昭和22年北海道生まれ。46年、中大法卒。雑誌編集者、新聞記者を経て現在、尚美学園大学非常勤講師、ロングステイ財団広報委員、日本旅行作家協会会員。『サンダル履き週末旅行』（竹内書店新社）をはじめとする旅行記のほか、エッセイ『裏方物語』（時評社）がある。